

厚生文教常任委員会行政視察報告書

厚生文教常任委員会の行政視察を実施した結果について、下記のとおり報告いたします。

記

- 1 期 日 令和7年10月21日(火)～23日(木)
- 2 視 察 地 栃木県大田原市、栃木県那須郡那須町、宮城県白石市
- 3 目 的 (1) 栃木県大田原市
「旧蜂巢小の利活用について（多機能型障害福祉サービス事業所）」
(2) 栃木県那須郡那須町
「旧朝日小の利活用について（那須まちづくり広場）」
(3) 宮城県白石市
「学びの多様化学校について（白石きぼう学園）」
- 4 参 加 者 野 口 康一郎 古 沢 清 志 後 藤 健一郎
沖 津 一 博 渡 邊 賢 一 安孫子 義 徳
佐 藤 耕 治 児 玉 崇
大 沼 務（財政課施設マネジメント推進室）
堀 和 敏（議会事務局）
- 5 視察概要 別紙のとおり

令和7年12月2日

厚生文教常任委員会
委員長 野 口 康一郎

寒河江市議会議長 柏 倉 信 一 殿

栃木県大田原市の視察概要

1 市の概要

大田原市は、栃木県の北東部、関東平野の北端に位置し、三本の川に囲まれた那須野が原の扇状地と八溝山系の山並みが連なる人口約7万人のまちである。東京からは新幹線で約70分。那珂川と箒川に挟まれた扇状地では、農業が盛んに営まれており、特にコメの収穫量、産出額は関東地方で1位となっている。また、コメのほかにも梨やイチゴ、アスパラガスなどの作物や高級国産牛肉も生産され、高い評価を受けている。おくのほそ道や那須与一にもゆかりがあり、歴史や文化においても魅力を持つまちである。工業団地には大手企業の製造拠点も立地しており、田園工業都市ともなっている。

2 財政の状況

- | | |
|-------------------|---------------------|
| (1) 令和7年度一般会計当初予算 | 35,056,000千円 |
| (2) 自主財源 | 14,806,613千円(42.2%) |
| (3) 依存財源 | 20,249,387千円(57.8%) |

3 主な調査結果

(1) 事業概要

市立蜂巢小学校が平成25年に廃校となったことに伴い、社会福祉法人と契約し、障害福祉サービス事業所として利活用しているもの。大田原市では、当該校を含め10校の廃校を利活用の対象としており、現に多くの校舎が利活用されている。

カフェ運営、焼き菓子の製造・販売、地元野菜の販売等を通じて、A型・B型それぞれの利用者に対し就労の場を提供している。また、地域貢献・活性化事業として、ギャラリー運営やイベントの開催、ワークショップ等も実施している。

(2) 期待される効果

- ①障害者の自立支援につなげるため、就労の場の確保、並びに工賃所得の引き上げの実現を目指す。
- ②hikari no café蜂巢小珈琲店を起点として、交流人口の増加及び地域経済の活性化が期待される。
- ③ギャラリー・イベントスペース等の利用や地元野菜の販売等により、地元住民との交流を通して地域の活性化に資する。

(3) 店舗の運営状況

直近1年間の総売上は約2400万円となっている。3000万円を超えた年もあったが、コロナ禍の影響により一時的な落ち込みを見せた。また、客単価は非常に高く、カフェ運営においても成功している事例となっている。

上記のような、好調なカフェ運営に伴い、就労する利用者たちに支払われる賃金・工賃についても、他と比較し高いものとなっている。

(4) その他の廃校舎の利活用状況

当該校舎は昭和初期の建築物であり、その古さもあってリノベーションのしやすさ等から利活用しやすいものであった。そのほかの校舎についてはRC造のものが多く、この事例とは違った難しさがあるとのこと。

大田原市では、貸し出す際は一棟貸しがベストと考えているが、1階部分のみ借り手がついている場所などもある。その場合は、2、3階の部分のランニングコストを行政が負担しなければならないなどの課題が出ている。また、貸出先の事業者が破産してしまったというような事例もあり、必ずしも本事例のような成功事例だけではないとのことだった。

4 所 感

廃校になった蜂巢小学校を公募型プロポーザルにより利用者を公募。現社会福祉法人が利用者と決まり、どのような使い方をするか地元説明会を開催したとのこと。田園風景が広がる場所と趣のある平屋の木造校舎にひかれ、障害者の学びの場となるカフェをオープンした。廃校を利活用する時に気をつけたことは「地域資源と地域の拠点として大切にしたいとの考え」とのこと。廃校になってしまった校舎でもその場所に通った卒業生にとっては思い出のある大切な場所である。その人達の思いを大切にするため、なるべく元の姿で残せる部分は残している。体育館や教室の一部は地域の方々も借りることが出来るようになっていて、同窓会の会場としてカフェを利用されている点はとても良いことだと感じた。視察日も多くのお客様がカフェを利用し大変な賑わいがあり素晴らしいことだと感じた。社会福祉法人が運営していることもあり同業の方の視察や民生員の方々がこぞって視察にいらしているとのことで、この取組への関心の高さが伺えた。

お話を聞く中で廃校の利活用には多くの課題もあるとわかった。大田原市では全部で12校廃校になったとのことだが、全てが上手く利活用できている訳ではないとのこと。学校を別の用途で使う場合、法律の面でクリアしなければならない課題もあるし、建物の維持管理、建物の構造により使いにくい物もあるとのこと。廃校になったら勿体ないから利活用していくべきだと思っていたが、維持管理のコストなどを考えると必ず利活用すべきかどうかは考える必要があると教えられたのが一番印象に残る。

栃木県那須郡那須町の視察概要

1 市の概要

栃木県北部に位置し、東京と仙台のほぼ中間地点にある。東京都心からは東北自動車道で約2時間半と交通利便性も高く、観光を中心に酪農、水田、石材業等も主要な産業となっている。まちの北西部には活火山である茶臼岳がそびえ、1390年の歴史を持つ温泉が「那須温泉郷」として観光の名所になっている。文化的には、歌人西行や源義経、松尾芭蕉に関する史跡も存在している。また、別荘地としても有名であり、那須御用邸がある。

2 財政の状況

(1) 令和6年度一般会計当初予算	15,867,000千円
(2) 自主財源	9,071,197千円(57.2%)
(3) 依存財源	6,795,803千円(42.8%)

3 主な調査結果

(1) 那須町の小中学校統廃合の状況

那須町小中学校適正配置計画に基づき、平成26年度から30年度にかけて、17小中学校(4中13小)を8小中学校(2中6小)に再編した。

(2) 廃校及び跡地利用の状況

平成25年4月に那須町学校跡地利用検討委員会が設置され、平成27年度にかけ幹事会、委員会を実施した。また、住民アンケートについても1回実施している。上記(1)のとおり、再編に伴い多くの学校設備が跡地利用として検討されることとなり、現在10校が対象となっている。

現在は、本事例を含む4校が民間事業者により活用され、3校が行政により活用(改修したうえで新設の小学校として活用するなど)されている。しかし、那須町の特徴である温泉(硫黄)の影響で老朽化が著しい校舎もあり、そこは解体撤去せざるを得ない状況とのこと。

(3) 旧朝日小学校の利活用までの経過

平成28年3月の閉校に先立ち、学区において意見交換会を開催した。その後、閉校後の説明会や庁議を経て(行政による使用、民間による使用等の優先順位は質問事項回答を参照)公募により利活用の方法を募集することに決定。平成29年3月に候補者が決定した。

4 所 感

那須町でも廃校の利活用に関しては那須町小中学校適正配置計画において「有効活用を検討していくものとする」とされていたことから那須町学校跡地検討委員会を設置し検討を開始したとのこと。

那須町での利活用の優先順位は

- ① 学校施設又は教育施設として利用(改修等の必要性が低いことから優先的に検討)
- ② 公共施設としての利用(公共施設又は公益的施設として検討)
- ③ NPO法人や民間企業への貸し付け(雇用創出や地場産業等の振興に資する物を優先的に検討)
- ④ 解体及び売却

とされていて、旧朝日小学校は学校等の利活用がなかったため民間への貸付となった。大田原市でもお話を伺ったが廃校の利活用する場合、1棟貸しが可能な事業者だと良いのだが、一部だけの利用では行政側の負担が大きくなり難しい側面もある。

本市の小学校は全て鉄筋コンクリート造で2階～4階建てのため全部を借りてくれる事業所が見つかるかどうか、見つかったとしても長く利用してもらえるように選定は慎重にしなければならなかったと感じた。

視察内容説明の後は町議会議員の皆様と意見交換会を行わせていただき、お互いのまちの現状や事業内容に関して有意義な意見交換をすることができた。

インターネットで色々な情報が取得できる世の中だが、出てきている情報は最後の完成された部分のみで、途中のプロセスが無い。プロセスの部分にこそ大事な情報があるのではないかと感じたし、生の声を聞いてみないと分からないことが沢山あると改めて感じた。

5 その他（那須町議会総務産業常任委員会との意見交換の状況）

視察事項に関する説明・質疑終了後、那須町議会議員の方々と意見交換をする時間を設けていただいた。議題となった主な内容は下記のとおり。

- ・那須町の観光について
- ・議会傍聴に関する取り組みについて
- ・議会報告会の取り組みについて
- ・議員報酬について
- ・寒河江市のスケートパーク整備について 等

宮城県白石市の視察概要

1 市の概要

白石市は、宮城県南部に位置し南境を福島県に接する人口約3万2千人のまちである。西は蔵王連峰、東は阿武隈山系に囲まれた盆地を中心に、市街地、農地及び森林地帯が形成されている。「こけしのふるさと」として知られる田園観光都市となっている。観光面では、白石城や宮城蔵王スキー場、キツネ村などがあり、温麺（うーめん）などと共に人気となっている。

人口については、昭和後期までは増加傾向にあったが、平成に入ってから自然減と社会減により減少が続いている。

国道4号、113号、東北縦貫自動車道、東北新幹線などが通り、南北・東西ともに宮城県南部の交通の要衝となっている。

2 財政の状況

- | | |
|-------------------|---------------------|
| (1) 令和7年度一般会計当初予算 | 19,217,307千円 |
| (2) 自主財源 | 7,848,864千円(40.8%) |
| (3) 依存財源 | 11,368,443千円(59.2%) |

3 主な調査結果

(1) 学びの多様化学校開校前の状況

白石きぼう学園開校前の市の不登校生徒児童の出現率は、令和4年度〈小学生1.81%、中学生8.02%〉令和5年度〈小学生4.93%、中学生7.54%〉となっていた。白石市においては、全国的な傾向と同様に増加傾向となっており、いずれも全国平均を上回る結果となっていた。

また、これまで行ってきた教育支援センターや別室支援等の既存の支援策には馴染めず、新たな学びの環境を望む生徒に対する支援を考える必要性が出てきた。市長や半沢教育長の強い意志も加わり、学びの多様化学校開校に向け動き出すことになった。

(2) 学びの多様化学校設置までの流れ

令和4年3月：場所や敷地、スケジュール、学校型・分散教室型などを教育委員会で検討の上、文部科学大臣に申請書を提出。

令和4年8月：プレスリリースなどの各種広報活動を開始。また、併せて条例改正や基金の設立等に向けた議会向けの動きも実施。

令和5年1月：文部科学大臣から指定を受け、県教委との調整や設置の届け出を行う。

令和5年4月：開校

全体的にスピード感を持ったスケジュールであるが、説明いただいた半沢教育長曰く、文部科学大臣からの指定を受けること等をまずクリアすることが重要であるが、国としても推進していることなのでそのハードルは高くなかったとのこと。

(3) 対象となる児童生徒

白石市在住の小学1年生から中学3年生までの児童生徒であることや、病気や経済的な理由を除き年間30日以上欠席、当校へ投稿しようとする意欲・興味・関心があることなどが条件となる。また、入学に当たっては、直接学校と保護者等がやり取りするのではなく、必ず教育支援センターが間に入り、入学の調整等を行うことで現場の教職員の負担軽減を図っている。

(4) 特徴

① 特別な教育課程の編成が可能

文部科学大臣からの指定を受けることにより、教育指導要領の内容を基に独自の教育を行うことができる。教科の新設や組み換え、指導内容の異学年への異動など、不登校児童生徒の現状に配慮した教育を行うことができる。また、当校では「今のあなたを認め、受け入れる学校」とうたっている。

② 特別な学び

上記①から、通常の小中学校とは違うカリキュラム等により日々の学びを進めている。その特徴は「学校らしくない学校」である。登下校の時間を柔軟に対応したり、授業中のクールダウン（気分転換）が可能であり、自分のペースを最大限尊重するものとなっている。また、一人一人の状況に合わせた「個別な学び」による基礎学力の保障も大きな特徴である。

③ 基金の設立

学びの多様化学校の開設・維持運営にかかる予算について、白石市では他の学校にかかわる予算を削って当該校へ予算を付けるという方法ではなく、教育委員会として資金調達の方法を考えるべきであるとした。その方法の一つとして、「白石みらい教育基金」を設立し、学校の志などに賛同する多くの方から寄付を受け、学校運営費に充てている。

学びの多様化学校では、設備や人員など既存の学校とは異なる対応が必要となるため、この基金により賄っている。

4 所 感

平成28年に成立した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」にある不登校特例校の整備等が国や地方公共団体の努力義務になったことを受けて、不登校児童生徒の居場所づくりと学びの場として令和5年4月に閉校していた校舎を使い「白石きぼう学園」が開校されたとの事。説明を伺って始めに驚いたのは申請から開校までの準備期間が約1年しかなかったことだ。関係各所とのやりとりや関わっていた方々の苦労は相当なものがあったと思うが、子どもたちのことを考え、スピーディに開校できたことは素晴らしいと感じた。不登校というと、いじめ等で学校に行きづらくなった子たちだとばかり思っていたが、不登校になる原因は人間関係や学習面など様々あり、誰にでも起こりうることだと認識させられた。

子どもたちも不登校になりたくてなっている訳ではないと思うので、自分のペースで自分なりに自分らしくいることのできる場所があるという事は大切な事なのだと改めて感じた。この

学校のことを聞いて、市外県外からも移住して通う生徒さんもいるとのこと。保護者の立場として子どもが学校に行きたくないと家に籠もるようになれば、小さい時だと特に、仕事も出来ない、出かけることもできない状態になるとのことだが、子どもが学校に行くようになることで自分の仕事が出来るようになったりと親のできることが増えると聞いて、特例校があることが親の希望となり救われる方がいらっしゃると思うとこれからの時代、大事になってくる施設になると感じた。

この度の視察では白石市教育長の半沢様から開校から現在に至るまでの説明を熱い想いで伺うことができた。誰一人取り残さない教育の実現のためにご尽力された熱意に敬意を表する。物事を動かすにはやはり「熱い想い」を持った方がどれだけいるかが重要なのだと改めて感じた。この学園に通うことで自信を取り戻し、元の学校に転校する生徒もいると聞いて驚いた。